

第 99 号
2014.1

北海道 米麦改良

稲作

・平成25年産米の全道総括

麦作

・平成25年産 小麦の総括
・平成25年度 全国麦作共励会審査結果

稲作
麦作

・平成25年度 稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ



会報誌「北海道米麦改良」はホームページでもご覧になれます。
<http://www.beibaku.net/>

一般社団法人 北海道米麦改良協会

売れる米を 低コストで 安定生産

めざそう 小麦の 品質向上

農産物検査の信頼性確保
を目指して

JA グループ北海道は一丸となって
農産物検査の信頼性確保に努めています

も く じ

稲 作	平成25年産米の全道総括	1
麦 作	平成25年産小麦の総括	6
	平成25年度全国麦作共励会審査結果	11
稲作・麦作	平成25年度稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ	12

稲 作

平成25年産米の全道総括

北海道農政部生産振興局 技術普及課（上川農業試験場技術普及室）

上席普及指導員（農業革新支援専門員） 竹 内 稔

1. 作柄の概況

12月6日に北海道農政事務所（以下農政事務所）が公表した作況指数は105、10a当たり収量は562kgであった。主産地上川(105)、北空知(104)、南空知(106)、石狩(105)をはじめ、全道各地で平年を上回る3年連続の豊作となった(図1)。

品質面でも農政事務所の11月30日現在の米穀検査実績(速報値)による一等米率は、うるち・もち米とも昨年よりは低いもののほぼ平年並の90%前後を維持しており(図2)、ホクレン入庫分(12月26日現在)をみても施設の調製効果もあり、ほぼ100%に近い1等

米率となっている。

また、ホクレンの仕分け集荷(主要五品種、精米タンパク質含有率6.8%以下)による低タンパク米出荷率は、全道平均(12月26日現在)で約25%と平成24年並の状況で推移しているが、24年に高かった函館、倶知安、苫小牧、留萌の各支所ではやや低下し、岩見沢、旭川で僅かだが上昇している(図3)。

品種別では、「ほしのゆめ」や「ゆめぴりか」の低タンパク米率が昨年に比べ低下したものの、作付面積の一番多い「ななつぼし」が約35%と平成24年並を維持しており(図4)、作付地帯の限られる「ふっくりんこ」でも、約5割を確保している。

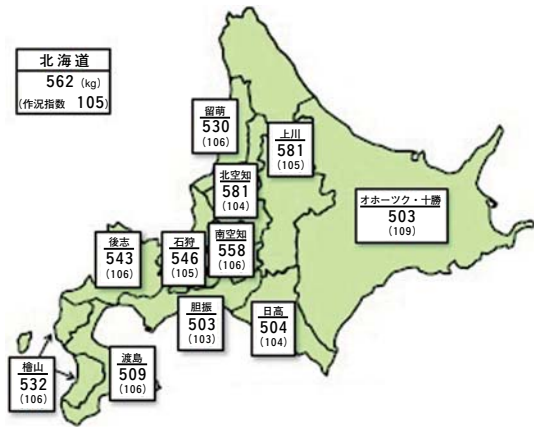


図1 作柄表示地帯別10a 当たり収量 (北海道農政事務所、12月6日公表)

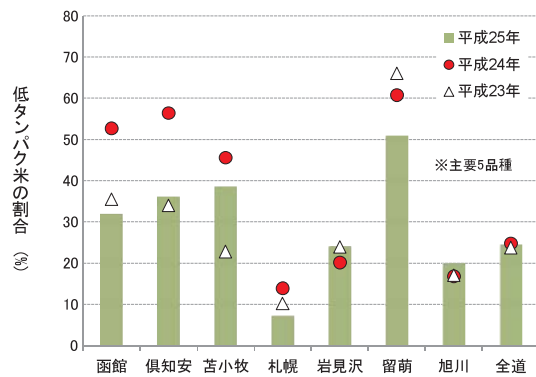


図3 低タンパク米の出荷状況 (ホクレン支所別、12/26現在)

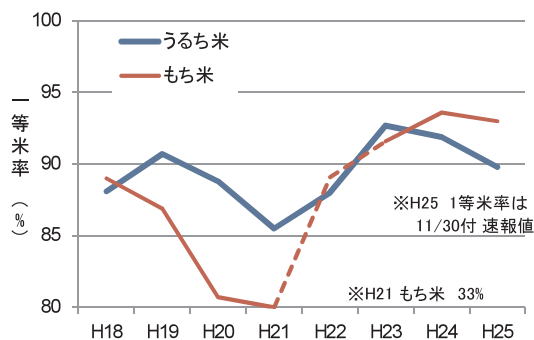


図2 年次別の1等米率(北海道農政事務所)

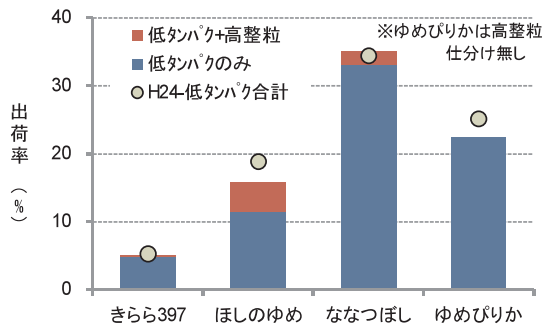


図4 品種別の低タンパク米生産状況 (ホクレン、12/26現在)

表1 平成25年各地域の根雪終日

(1981~2010平均、アメダス地点)

区分	長期積雪(根雪)終日			
	平成25年	平年	差(日)	24年の差(日)
札幌	4月12日	4月3日	▲9	▲8
旭川	4月14日	4月8日	▲6	▲11
岩見沢※	4月20日	4月8日	▲12	▲19
網走	4月6日	4月3日	▲3	▲10
函館	3月24日	3月13日	▲11	▲20

注：※は岩見沢試験地、平年値は1971~2000年、▲は遅れ

2. 気象経過と生育の推移

(1) 異常低温で春作業、出芽に遅れ

平成25年も春耕期から作柄の危ぶまれる年だった。総積雪量は一昨年よりも少なかったものの、3月に入ってからの降雪や3月下旬~4月中旬の低温・日照不足により、各地の根雪終日は、旭川が4月14日(平年比6日遅れ)、岩見沢が4月20日(同12日遅れ、岩見沢試験地)、函館で3月24日(同11日遅れ)となった(表1)。

融雪後もほ場の乾燥は進まず、作業の遅れと湿潤条件下での練り返しで施肥ムラや透水性の悪化を招いているほ場が多く見られた。

平成24年とは異なり、は種後も天候不順が続いたため、作業の遅れに加え、出芽の遅れや不揃いが目立った。苗の生育も緩慢で草丈は低く、葉数、地上部乾物重は平年に劣り、苗質は低下した。

移植作業は平年に比べ3~4日も遅く(全道平均の移植期:5月28日)、6月に入ってからピークを迎えた地域もあり、移植時期の地域間差は例年に比べ大きくなった。

(2) 好天に支えられた初期生育

移植直後は低温・強風で生育の停滞した地域もみられたが、5月末からの好天により、総じて活着は良好となり、分けつ始では一気に平年並まで回復した。

その後も盛夏並の高温多照の日も出現し、好天が続いたため、初期生育は旺盛となり、

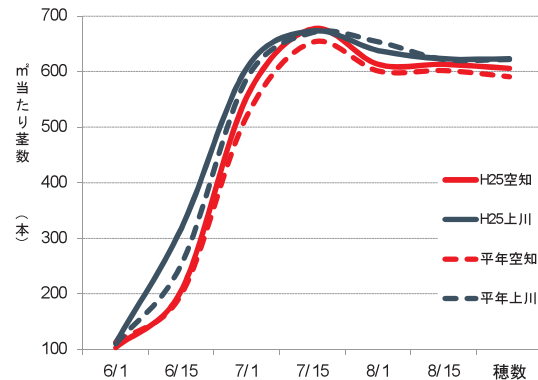


図5 時期別の茎数の推移

(道農作物生育調査)

生育量は平年並~上回る状況であった。特に茎数は、平年に比べ20~30%も増加した地域もみられた(図5)。

幼穂形成期には生育は平年並からやや早めとなり、冷害危険期の低温も無く順調に経過した(表2)。

出穂期は平年に比べ4日程度早まったが、早期異常出穂の発生(早生品種)、曇雨天による出穂の停滞、遅発分けつの有効化などで、出穂のばらついたほ場が目立った。

(3) 断続的な雨と寡照下での登熟

出穂後は、一時最低気温の低い日もみられたが、8月後半まで高温状態が続いたため、登熟は中盤まで順調に推移した。しかし、8月2半旬以降、雨天の日が多く、日照時間が少ないことに加え、月末には気温低下とともに、不安定な天候に終始したため、後半の登熟速度が鈍化した(図6)。

収穫は、8月下旬から一部で始まったものの、9月も降雨が多く軟弱なほ場状態や倒伏の拡大による作業性の低下、他作物との作業の競合などもあり、収穫期間は例年より長期化した(図7)。

また、8月以降道内を断続的に襲った大雨による冠・浸水や降雹の影響で、一部地域では、収量や品質が低下した。

表2 全道各地における作業期節と生育期節の比較

振興局名	作業期節				生育期節				
	は種期	耕起盛期	移植期	収穫期	出芽期	分けつ始	幼穂形成期	出穂期	成熟期
石狩	▲3	▲8	▲4	+2	▲3	▲1	±0	+2	+2
空知	▲3	▲5	▲4	±0	▲4	▲1	±0	+3	+2
後志	▲2	▲6	▲4	+3	▲3	±0	+1	+5	+5
上川	▲2	▲5	▲2	+3	▲3	±0	+4	+7	+8
留萌	▲3	▲8	▲6	+3	▲3	▲1	+1	+4	+5
渡島	▲1	▲3	▲3	+5	▲1	+3	+6	+3	+6
檜山	▲4	▲2	▲1	+3	▲4	+3	+7	+5	+3
胆振	▲2	▲5	▲1	+6	▲2	+1	+1	+4	+5
日高	▲1	▲2	▲1	+3	▲2	+1	+3	+4	+4
オホーツク	±0	▲10	▲6	▲1	±0	▲3	▲3	+5	+4
平均	4/22 (▲3)	5/11 (▲5)	5/28 (▲4)	9/21 (+2)	4/29 (▲4)	6/8 (±0)	6/30 (±0)	7/25 (+4)	9/9 (+4)

※ 普及センター作況調査による。

※ () 内は平年に対する遅速、+は早い、▲は遅れ。

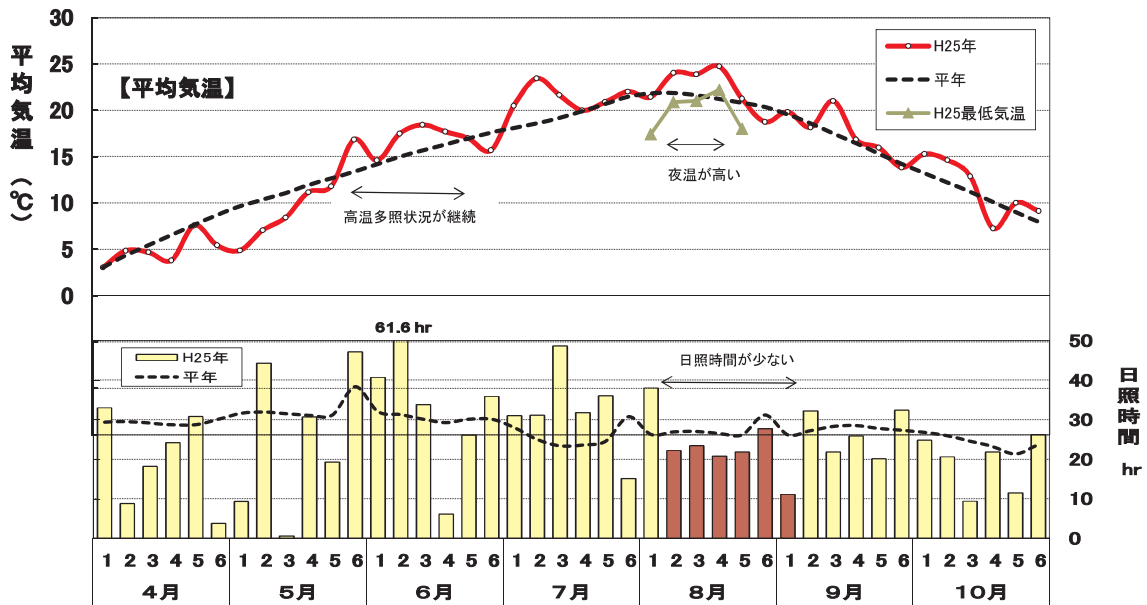


図6 平成25年の半旬別気象経過 (岩見沢測候所)

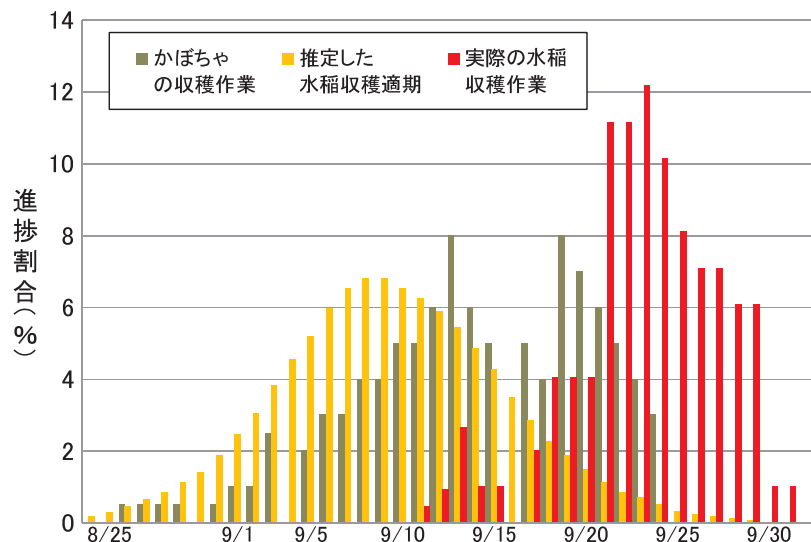


図7 水稲等の収穫作業の推移

(平成25年上川管内A町、普及センター調べ)

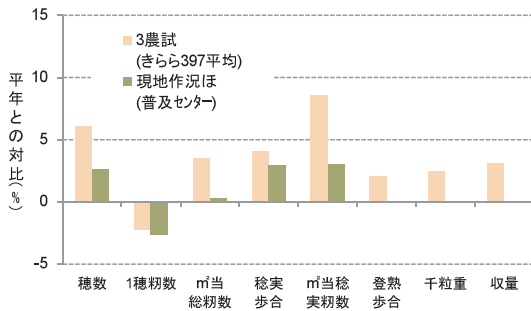


図8 収量構成・決定要素の平年対比

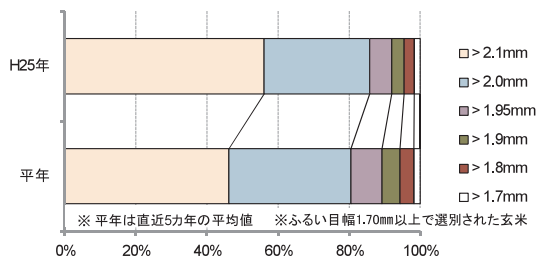


図9 ふるい目幅別重量分布の状況
(北海道農政事務所)

3. 収量確保の要因と品質・食味の特徴

(1) 作柄を決めたポイント

平成25年の豊作を支えた要因は、平成24年のような圧倒的な稔実初数の多さではなく、やや大きめの初穀と平年以上の登熟積算温度を確保したことで、登熟歩合も高まり、千粒重が重く整粒歩合が向上したことによる (図8、9)。

また、穂数または一穂初数が確保できず、m²当たり総初数で平年を下回った地域もみられたが、不稔初が少ないため、平年並の稔実初数を確保できたことも豊作に大きく寄与した。

(2) 良食味だが白未熟粒の発生も

不稔初が少ない一方で弱勢初も稔実したため、大きな青未熟粒がフルイ目上に残ったり、全道的には乳白・腹白粒といった白未熟粒が多発し、外観品質を低下させた。

特に白未熟粒は、春先の不良条件下での耕起・碎土によるワキの被害や根張りの悪さに加え、登熟前半の高夜温や登熟後半での長期にわたる曇雨天、および稲体の栄養状態などが複雑に絡み合いながら発生したものと考え

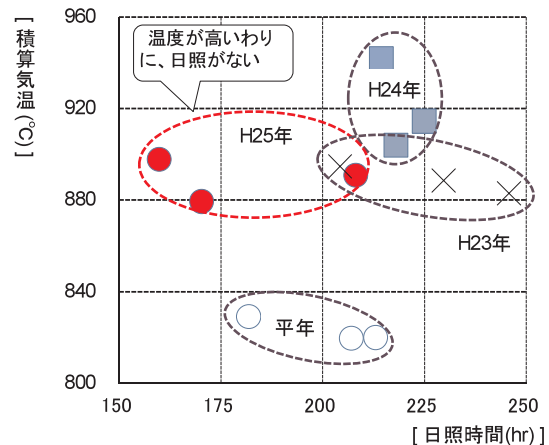


図10 年次別の登熟積算気温と日照時間の比較 (比布・岩見沢・北斗アメダス、きらら397出穂後40日間値)

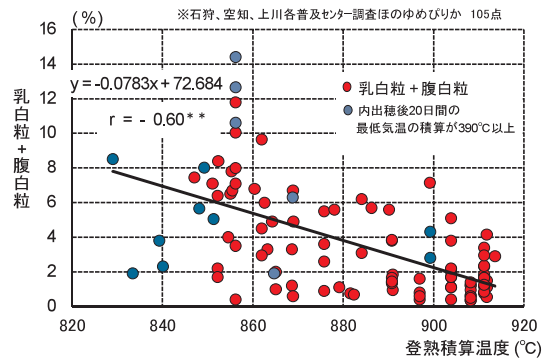


図11 出穂後40日間の登熟積算温度と乳白・腹白粒

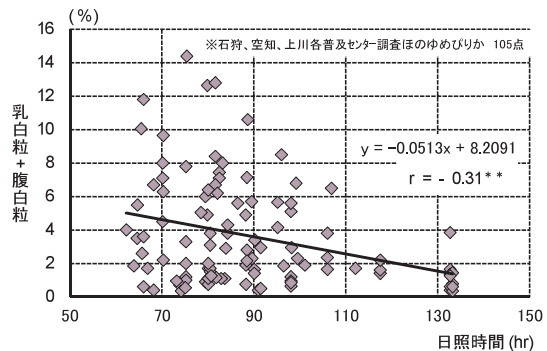


図12 出穂後20日間の日照時間と乳白・腹白粒

られる (図10、11、12)。

サンプル数に差があり一概にはいえないものの、普及センターで行った白未熟粒の調査数値から品種別の発生状況を見ると、「きたくりん」で白未熟粒、特に基白粒が最も多く、「ゆめぴりか」「きらら397」では乳白粒の発生が多かった (図13)。

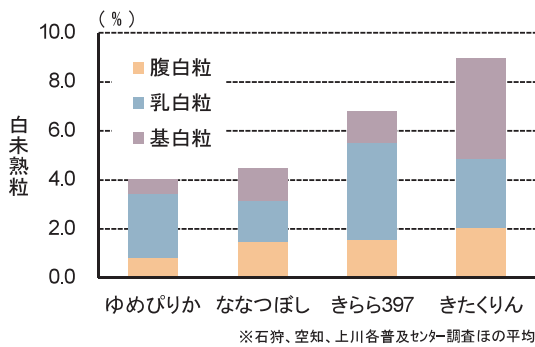


図13 品種別の白未熟粒の発生状況

低タンパク米の出荷状況は、全道平均で3割弱（12月末現在）に留まるものの、登熟期間前半（20日間）の積算温度が平年より高く、出穂後40日間の登熟積算温度も約880～890℃（3農試平均）と平年以上を確保していることから、アミロース含有率は、平年より低くなり、良食味を維持することができた。

4. 病害虫の発生状況

いもち病は早期に感染好適条件となり、葉いもちの初発が早い地域もあったが、的確な防除によりその後の進展は見られず、登熟後半にかけて散発的な穂いもちが見られた程度で、総じて発生は少なく被害はほとんどな



写真1 稲ばか苗病の目立つ水田

かったものと思われる。

紋枯病（疑似紋枯病含む）の発生は、例年に比べ多い地域もあったが、大きな被害には至らなかった。

ばか苗病については増加の傾向がみられ、苗代での発生に止まらず、本田で病徴を呈する稲株が散見された。ただし、収量的な被害は軽微と思われる。

害虫では、アカヒゲホソミドリカスミカメが7月6半旬から8月3半旬にかけ急激に捕虫数が多くなったため（病虫害防除所8/2付け注意報第3号）、被害が心配されたが、防除の前倒しや追加防除等により、一部を除き斑点米被害は少なかった。

■ 本年の栽培に向けて

平成25年も異常気象に振り回された一年となったが、春先の悪状況を考えれば上々の結果といえる。ただし、例年以上に個人差や地域差が多く、品質確保のための調製作業にも苦労した年でもあった。

天気次第で、適期作業ができず、良好な生育にならないことはよくあることで、問題はそれらのリスクをいかに回避しうるかを常に心がけておくことが重要である。

近年、恒常化しつつある春先の天候不順に対しては、前年の秋から乾田化対策を徹底しておく必要がある。また、平成25年のような出芽の遅れには、ハウス内の温度を適正に保つよう、速やかに対応することも肝要である。

このような基本技術の積み重ねが、健全な稲体をつくり、気象条件の影響を最小限にとどめて白未熟粒等の発生軽減にも結びつくことになる。

一方、病虫害ではばか苗病の発生が増加しており、「健全な種子の使用」と「種子消毒の徹底」が重要である。特に、自家採種および由来の不明な種子は使用を避けるべきである。

基本技術に沿った栽培管理を駆使しつつ、本年も良質米が安定生産されることを期待したい。（終）

麦 作

平成25年産 小麦の総括

北海道農政部生産振興局 技術普及課 北見農業試験場技術普及室

上席普及指導員（農業革新支援専門員） 菅原 敏治

昨年春の記録的な低温・寡照の影響により生育が心配されたが、結果的に生産者はじめ関係機関・団体の努力もあり、北海道の平成25年産小麦の収量（農林水産省発表）は、秋まき小麦447kg/10a（平年対比101%）、春まき小麦319kg/10a（平年対比112%）と平年並から良となった（表1）。品質では、ホクレン扱い分による秋まき小麦の1等麦比率は、過去4年間で昨年に次ぎ2番目に良い成績となった（表2）。

主力品種である「きたほなみ」の収量は、昨年には及ばなかったものの平年並となった。

また、品質ランク区分でもすべての項目が基準値をクリアできた（表3）。

以下、生育経過を振り返りながら今後の栽培の資に供したい。

表1 平成25年産小麦の作付面積と収穫量（北海道）

区 分	作付面積 (ha)	10a 収量 (kg/10a)	前年対比 (%)	平年収量 (kg/10a)	平年対比 (%)
秋 ま き	108,100	447	88	442	101
春 ま き	14,000	319	93	286	112

注1) 農林水産省大臣官房統計部発表（25年11月19日）

2) 平年収量は過去7年の豊凶年を除く5年平均

表2 麦類検査実績の推移

品 種 名	1 等 麦 比 率 (%)			
	22年産	23年産	24年産	25年産
ホクシン	49.3	69.8	77.3	—
きたほなみ	53.3	79.2	89.2	81.9
ホロシリコムギ	0.0	78.5	86.9	—
タクネコムギ	62.3	79.0	86.8	—
きたもえ	20.6	9.7	61.9	84.4
キタノカオリ	63.9	81.3	73.2	96.6
ゆめちから	—	—	72.8	68.1
秋まき計	50.2	78.7	88.7	81.4
春よ恋	35.2	76.1	83.5	93.7
ハルユタカ	0.0	79.8	72.1	91.4
はるきらり	63.9	85.4	88.8	91.1
春まき計	33.7	77.4	83.7	93.1
普通小麦計	49.4	78.7	88.4	82.3

注1) ホクレン扱い分

注2) 25年産については、11月29日の速報値

表3 平成23・24・25年産「きたほなみ」の品質

分析項目	23年産	24年産	25年産	基準値
容積重(g/ℓ)	851	858	856	840
F.N.(sec)	409	398	376	300以上
タンパク(%)	10.7	10.8	11.1	9.7~11.3
灰分(%)	1.49	1.41	1.39	1.60以下

注1) ホクレン扱い分

注2) 項目別加重平均値

1 小麦の作柄経過

(1) 秋まき小麦

は種期は、9月上旬に降雨があり平年よりやや遅れた地域もあったが平年並となった（表4）。また、は種後の気温が高く経過したことから越冬前の生育は平年を上回った。

起生期は、積雪が多かった石狩、空知、上川で融雪が平年より5～6日遅れとなり全道的には平年並となった。幼穂形成期は、4月中旬から5月中旬に記録的な低温で経過したため平年より5日遅れた。特に、低温の影響が大きかったオホーツク海側では9日遅れと

表4 平成25年秋まき小麦の生育状況

振興局	播種期 (月日)	起生期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	茎数(本/m ²)			穂数 (本/m ²)
							(10.15)	(5.15)	(6.15)	
空知	9.20(0)	4.16(遅5)	5.12(遅5)	6.4(遅6)	6.11(遅2)	7.21(遅1)	210(85)	1,433(105)	790(100)	684(97)
石狩	9.23(0)	4.20(遅6)	5.14(遅6)	6.5(遅5)	6.14(遅4)	7.22(0)	311(95)	1,538(118)	773(106)	651(100)
上川	9.17(遅2)	4.22(遅6)	5.16(遅8)	6.6(遅6)	6.13(遅4)	7.20(早1)	417(70)	1,111(101)	611(87)	545(84)
オホーツク	9.25(遅1)	4.9(0)	5.15(遅9)	6.7(遅4)	6.15(遅3)	7.26(早3)	181(76)	1,433(87)	788(90)	626(79)
十勝	9.24(0)	4.4(早4)	5.8(遅3)	6.4(遅3)	6.12(遅1)	7.25(早1)	186(86)	1,843(111)	857(103)	724(98)
全道	9.23(遅1)	4.10(0)	5.11(遅5)	6.4(遅4)	6.13(遅3)	7.24(早1)	230(82)	1,583(104)	802(98)	673(92)

注1) 各生育期節の()内の数値は平年対比の日数
 2) 茎数・穂数の()内の数値は平年対比の百分率(%)を示す
 3) 各農業改良普及センター調べ

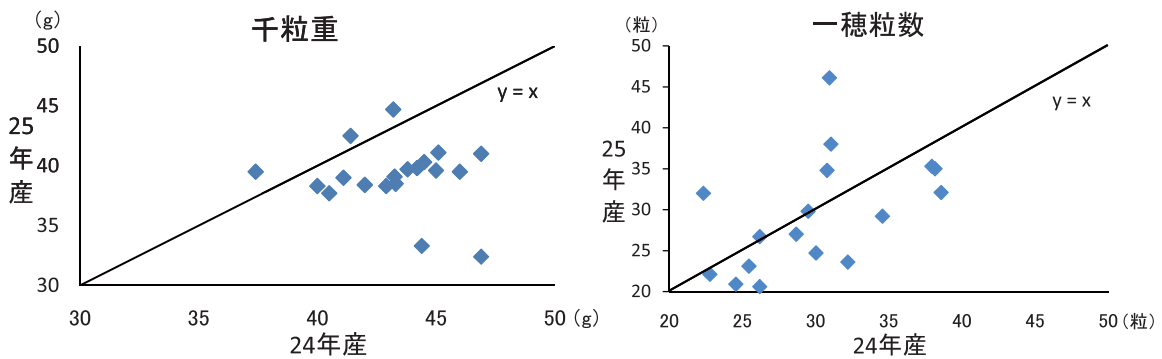


図1 平成25年産と平成24年産の千粒重・一穂粒数の比較
 (現地委託試験成績より「きたほなみ」)

なった。出穂期は、平年より3日遅れの生育で推移したが、5月下旬以降の気温上昇により回復した。しかし、穂数はやや少なく、稈長はやや短くなった。

成熟期は、7月上旬から中旬の高温・少雨に経過し平年より1日早まった。そのため、登熟期間は41日間(平年44日間)と平年より3日短くなった(表4)。

このことから、全般に穂数は少なく、一穂粒数も平年よりやや少なくなったため、粗原収量は平年を下回った。しかし、一穂当たりの充実が良く製品歩留りが高かったことから、製品収量はおおむね平年並となった。

全道21ヵ所の現地委託試験における収量・穂数・千粒重から算出した一穂粒数の比較では、千粒重は平成24年産に比べ軽く、一穂粒数も少ない傾向であった(図1)。

収穫作業はおおむね順調で、収穫期は、上川とオホーツクが平年より2~3日早くなっ

た。十勝では、7月24日から8日連続の降雨により(図2)収穫期は4日遅れとなり、倒伏も見られたことから品質が低下した。また、全道的に、赤さび病と縞萎縮病の発生が目立った。

(2) 春まき小麦

は種期は、降雨により大幅に遅れ、特に、ほ場の乾燥が遅れた上川では平年より18日遅くなった。

出芽期は、5月中旬まで低温・寡照に経過したため、オホーツクでは平年より11日遅れ、上川では18日遅れとなった(表5)。出穂期は、5月下旬からの高温により生育は回復し2~3日遅れとなった。また、成熟期は上川で1日遅れ、オホーツクでは3日早くなった。

石狩・空知の初冬まき栽培の幼穂形成期は、積雪の多かった空知で10日遅れ、上川も6日遅れた。

出穂期では、5月下旬からの高温により生

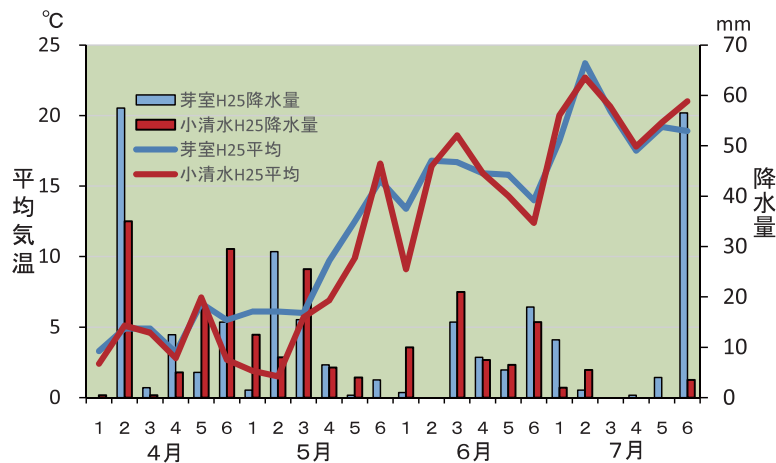


図2 4～7月の芽室町と小清水町の平均気温と降水量

(アメダスデータ)

表5 平成25年春まき小麦の生育状況

栽培様式	振興局	播種期 (月日)	出芽期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)
春まき	上川	5.8(遅18)	5.21(遅18)	— —	6.18(遅4)	6.25(遅2)	8.5(遅1)
初冬まき	オホーツク	4.22(遅3)	5.12(遅11)	6.6(遅5)	6.18(遅3)	6.29(遅3)	8.7(早3)
初冬まき	空知	11.14(0)	— —	5.24(遅10)	6.8(遅7)	6.13(遅2)	7.28(0)
初冬まき	石狩	11.13(遅2)	— —	5.21(遅6)	6.9(遅6)	6.17(遅3)	7.29(早1)

注1) 各生育期節の()内の数値は平年対比の日数

2) 各農業改良普及センター調べ

育が回復し平年より2～3日の遅れであった。しかし、成熟期は平年並であった。

収穫期は、好天に恵まれ収量が多く1等麦比率でも過去4年間で最も高くなった(表2)。登熟期間はやや短かったものの、赤かび病などの病害発生も少なく千粒重は平年並となり、歩留まりも良好であった。

しかし、上川を中心にムギキモグリバエが発生し被害面積は、春まき栽培で2.0%、初冬まき栽培でも5.9%の被害となった。

2 特に目立った病害について

(1) 赤さび病

平成25年は、全道各地で発生が認められた。発生現況調査によると、上川、十勝では「中」発生以上の被害面積率が10%以上、石狩、空知、後志および胆振でも5%前後の被害面積率となり、全道では9.3%(平年0.8%)と近年にない多発生となった。

多発生の要因として、5月下旬から6月上旬が高温・少雨に経過したことから、発生に適した気象条件であったことが考えられる(図3)。

予察定点ほ場(長沼、芽室)では、6月4半旬から発病が急激に増加し、赤さび病抵抗性が「やや強」の品種である「きたほなみ」でも全道的に発病が認められた。

(2) 縞萎縮病

本病は、土壤伝染性のウイルス病で、土壤生息糸状菌のポリミキサ・グラミニスにより媒介される土壤伝染性のウイルス病で、25年産では近年にない多発した。

本病の多発には二つの条件があり、一つは、秋季の気温の低下が遅れて感染期が長引くことである。もう一つは、春先の低温により発病期を長引かせ、被害を大きくすることである(図3)。

通常は、6月以降の気温上昇にともない病

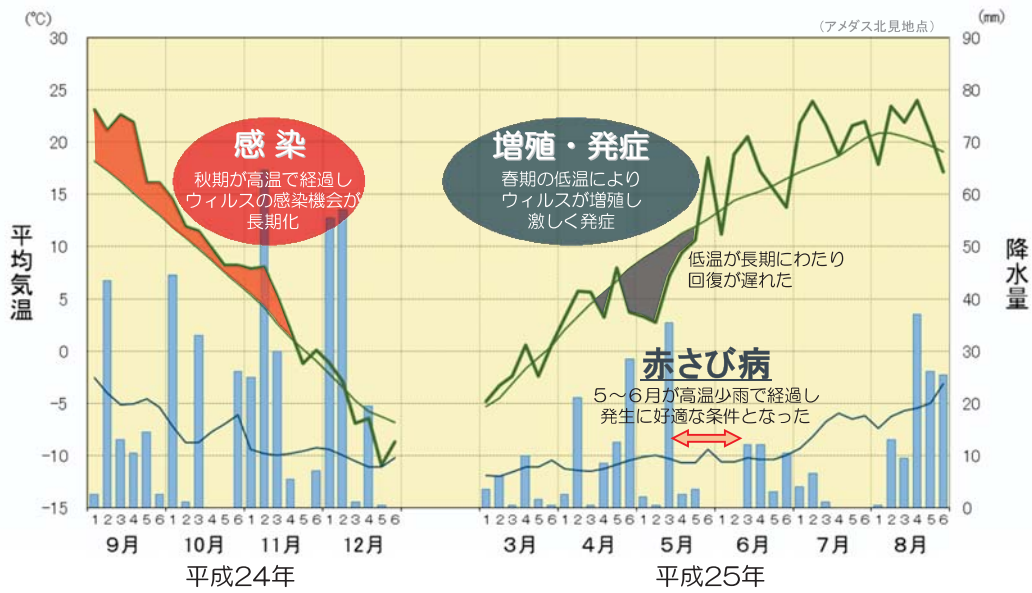


図3 平成25年産の気象経過と縞萎縮病・赤さび病の発生要因



写真1 「きたほなみ」の止葉葉身および下葉に発生した赤さび病
(上堀原図) 7月9日撮影

徴が消え生育は回復するが、低温が長く続くと生育の回復が遅れる。このことから、オホーツクでは、縞萎縮病による生育抑制の影響が残ったほ場が散見された (写真2)。さらに、平成25年産では、縞萎縮病抵抗性「強」の「ゆめちから」においても5月中旬に縞萎縮病の症状が確認された (写真3、北海道農政部平成25年9月 営農技術対策より)。



写真2 「きたほなみ」生育抑制による出穂のばらつき

(佐々木原図) 6月17日撮影



写真3 「ゆめちから」の黄化症状

(佐々木原図) 5月24日撮影

3 次年度に向けて

「きたほなみ」は、収量構成要素である穂数や一穂粒数などを確保しやすい品種である。

しかし、茎数過多・倒伏・肥料不足・登熟期間の短縮等の影響で同化産物の供給が不十分になると、細麦や製品歩留りの低下を招くおそれがある。

「きたほなみ」の栽培方法として、ほ場条件に合った適切な目標収量を設定し、それに応じた茎数管理を行う。加えて生育後半まで肥料不足とならないよう、根の活性を維持し施肥効率を高める栽培管理および、心土破碎などの施工や、有機物の投入を積極的に行うとともに、透排水性の改善と土壌 pH を適正に保持することが重要となる。

また、近年、病害虫の発生が目立つことから、ほ場観察に努め、病害虫発生予察と適期防除の励行と適正な輪作体系を図ることも重要である。

麦 作

平成25年度 全国麦作共励会審査結果

平成25年度全国麦作共励会中央審査委員会が12月24日(火)に開催され、北海道ブロックから推薦された農家の部の堀川さんご夫妻(斜里郡清里町)が「全国米麦改良協会会長賞」を受賞されました(本年度、集団の部の出展はありません)。

中央表彰式は、平成26年2月19日(水)(東京都千代田区ホテルルポール麹町)で開催されることになっております。

なお、各賞の受賞者は下記のとおりです。

平成25年度 全国麦作共励会受賞者

(敬称略)

I. 農家の部

賞 名	氏 名	住 所
農 林 水 産 大 臣 賞	小野田 裕二	愛知県西尾市深池町神田
全国米麦改良協会会長賞	堀川 哲男 小百合	北海道斜里郡清里町上斜里
全国農業協同組合 中央会会長賞	内田 武士	佐賀県佐賀市東与賀町下古賀
全国農業協同組合 連合会会長賞	島崎 恒守	福井県福井市東大味町
日本農業新聞会長賞	首藤 信子	愛媛県西条市周布

II. 集団の部

賞 名	集 団 名	所 在 地
農 林 水 産 大 臣 賞	農事組合法人 アグリ赤林	岩手県紫波郡矢巾町赤林
全国米麦改良協会会長賞	農事組合法人 上増田	群馬県前橋市上増田町
全国農業協同組合 中央会会長賞	下田芦塚 営農組合	福岡県久留米市城島町下田
全国農業協同組合 連合会会長賞	農事組合法人 たちばな	愛媛県今治市郷六ヶ内町
日本農業新聞会長賞	長久保 営農組合	岐阜県海津市海津町長久保

平成25年度 稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ

本年も良質な米麦の生産に向け、生産者・関係機関を対象とし、優良米麦の生産に役立つ研修会を開催致します。

米麦生産技術に係る優良事例発表の他、本年度の特別講演として「食と健康」や「地産地消」について、外部講師より講演を頂きます。

詳細については、別途、本会ホームページ・農業新聞による告知、ならびに地区米麦改良協会からの文書によりご連絡させていただきます。

生産者・農協職員の他、市町村・関係機関担当者の皆様も参加いただけますので、多数の受講をお待ちしております。

受講料は無料ですが、参加申し込みにつきましては、事前に地区米麦改良協会等へご連絡願います。

1. 日時 平成26年3月3日(月) 13時00分より(12時30分受付開始)

2. 場所 ホテルモントレエーデルhof札幌

(札幌市中央区北2条西1丁目 TEL:011-242-7111)



平成24年度 稲作・麦作総合改善研修会

【平成25年3月1日(金) ホテルモントレエーデルhof札幌】

ホームページでもご覧になれます。http://www.beibaku.net/

～水稲生産農家の皆様へ～

ばか苗病防除に向けた取り組みをお願いします!

ばか苗病が多発傾向にあります。
本病の防除には適切な種子予措と環境衛生の徹底が必要です。

対策

的確な種子消毒・浸種・催芽
～消毒効果を維持するために～

- ◆ばか苗病は発病後の薬剤防除ができませんが、**的確な種子消毒(化学農薬等)**や種子予措等の環境改善で抑えられます。
- ◆自家採種は保菌リスクが高いため、100%採種ほ産種子を使用します。

表1 種子消毒法による防除効果の違い
(平成22年北海道普及推進事項から抜粋)

種子消毒法		防除効果 (ばか苗病)
単独処理 (対照区)	エコ (エコホープ 浸種前200倍浸漬)	C~D
	エコDJ (エコホープDJ 浸種前200倍浸漬)	D
	食酢 (食酢50倍)	D
	温湯 (温湯消毒60℃10分)	B~C
	タフ (タフブロック 200倍)	D
組合せ 処 理	エコ + 食酢	B~C
	エコDJ + 食酢	B~C
	温湯 + 食酢	B~C
	温湯 + タフ	B~C

- ◆**種子消毒のポイント**
- ①微生物農薬は薬液温度を守る。
- ②温湯消毒は処理温度・時間・量を守る。
- ③温湯消毒種子は速やかに冷やし、乾燥または浸種する。
- ④各種子消毒法を組合せて防除効果を高める(表1)。
- ◆**消毒方法が異なる種子や未消毒種子を一緒に浸種しない。**

(防除効果) B: 化学農薬と比べほぼ同等、C: やや劣る、D: 劣る

※ベンレートによる種子消毒は、ばか苗病に効果がありません。

対策

環境衛生の徹底
～周辺環境から感染を防ぐために～

- ◆ばか苗病の発生したほ場の稲ワラや籾殻、米ぬか、粉じん等は伝染源になります。**種子予措を行う作業場やその周辺を十分清掃します。**
- ◆消毒前の種子と消毒後の種子は同じパレットやシート等に置かない。
- ◆浸種催芽で使用する機器や容器は、使用前後に十分洗浄する。
品種や消毒方法が変わるごとに十分に洗浄する。



浸種・
催芽中
に感染



平成26年1月

良質米麦の出荷目標



一等米 100%
整粒歩合80%以上確保
精米蛋白質含有率6.8%以下
仕上がり水分14.5～15.0%
入れ目1%以上確保
全量種子更新



一等麦 100%
低アミロ麦皆無
DON暫定基準値1.1ppm
以下でできるだけ低いこと
赤かび粒混入限度 0.0%
異臭麦皆無
十分な入れ目の確保
全量種子更新

農産物検査事業の方針

公平、公正、迅速に行う。
必要な技術的能力の維持・向上に努める。
客観性・公平性から他部門からの影響排除。
制度の適正な運営に寄与する。



発行所

一般社団法人 北海道米麦改良協会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル5階 TEL 011-232-6495 FAX 011-232-3673

【業務部】E-mail beibaku@basil.ocn.ne.jp

【検査部】E-mail beibaku-kensa@carrot.ocn.ne.jp

北海道米分析センター

〒069-0365 岩見沢市上幌向町216の2 TEL 0126-26-1264 FAX 0126-26-5872

E-mail bun1@plum.ocn.ne.jp

<http://www.beibaku.net/>